

スミスの貨幣論

——古典派と価値形態論（1）——

馬場 宏 二

2006年10月3日～10月17日

『資本論』第一章第三節「価値形態」の序文に当る文章で、マルクス（Karl Marx, 1818～1883）は価値形態論を、「価値表現の発展」「貨幣の生成の論証」と要約し、それによって「貨幣の謎」が解消すると意義付けた。彼によればそれはブルジョア経済学がかつて試みたことのないものであった⁽¹⁾。そのことは客観的に承認されて良い。価値形態論は、マルクスの数ある理論的貢献のうちでも、際立って独創性の強いものだったのである。

ブルジョアイデオロギーが絡んだ認識では、資本主義社会の歴史的特殊性を、問題として握めない。資本主義経済の歴史が深く長いイギリスが経済学の本場になったのは、歴史的事情からすれば不思議はないが、この事情は同時に、商品経済関係が人間関係に普遍的なものだとする歪んだ認識を、経済学に強制する原因にもなった。アングロサクソン系の経済学では、貨幣はなぜ諸商品を自由に購入し得るかといった根源的な問題への関心は極めて薄い⁽²⁾。

マルクスが資本主義分析の体系を、商品・貨幣・資本の流通形態から始めたことは、彼がこの歪曲を解消して新しい認識視角を切り開いたことを意味する。とりわけその軸芯となったのが価値形態論であった。そのことは自覚されていた。「労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式のもっとも抽象的な、しかしまたもっとも一般的な形態であって、これによってこの生産様式は、社会的生産の特殊な一種類として、したがって同時に歴史的に位置づけられているのである」。この生産様式を永遠の自然形態と見誤れば、価値形態、商品形態、貨幣形態、資本形態の特殊性を見誤る、と⁽³⁾。

彼が新しい認識視角を獲得し得たのは、ドイツ人亡命者としてイギリス社会に心底から浸らなかつたばかりか、革命的イデオロギーによってブルジョアイデオロギーを吹っ切っ

ていたことによると考えられる。それが、アングロサクソンの鱗を除去するのに役だったであろう。だが同時に、マルクスの学問的生涯がヘーゲル哲学から出発していたことが、新たな構図の獲得を容易にしたことも留意さるべきであろう⁽⁴⁾。

1. 問題

とは言え、本稿の主関心は哲学的側面の掘り下げではない。ここではむしろ、ブルジョア経済学の歴史のなかに、価値形態論の萌芽たり得た認識が、いささかは含まれていたことに注目しようと言うのである。

価値形態をマルクスの程度にまで深く的確に捉えたブルジョア経済学者が見当たらないことは常識である⁽⁵⁾。管見の限りでも、ペティ (Sir William Petty, 1623~1687)、マーチン (Henry Martyn, 1665~1721)、ヒューム (David Hume, 1711~1776)、カンティロン (Richard Cantillon 178~90?~1835?) ら、スミス (Adam Smith, 1723~1790) 以前の経済学には、金属貨幣論や量的関係の解明を主とする貨幣機能論はあっても、貨幣本質論、貨幣とは何か、それはなぜあらゆる商品を購入し得るのかという根源的論点の解明はなく、そもそもそうした関心がない。スミス以後のリカード (David Ricardo 1772~1823) やリカーディアンは、むしろこの関心を吹っ切ったところに成立しているように見える。ところがスミスは、価値形態論を定式化していない点では同様でも、それに至る関心は確かにあり、それが彼の価値論の複雑な構造と縋い交ぜになっていたのである。

類似の関心を単調かつ執拗に繰り返したのが、誤解交じりながらリカード価値論の批判を繰り広げたベイリー (Samuel Bailey, 1791~1870) であった⁽⁶⁾。価値形態論形成史においてベイリーが重要な存在であることは明らかである。マルクスはベイリーを「価値形態の分析に従事した少数の経済学者」⁽⁷⁾と評価した。これは「古典派経済学の根本的欠陥の一つは…価値の形態を見いだすことに成功しなかった」「A. スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもよいものとし…取り扱っている」⁽⁸⁾といった特徴付けと対比されて良い。『資本論』の価値形態論と物神性論の中で、ベイリーの著書や議論は、マルクス自身の『経済学批判』⁽⁹⁾と並んで頻繁に言及されており、他の論者に比べて際立って多い。これはマルクスが価値形態論の展開に当たって、ベイリーを強く意識していた証拠である。価値形態論を構想す

る際に、マルクスが何よりもベイリー説と対峙していたことは疑いなかろう。

そのベイリーがリカード批判に当たって準拠したのがスミスである。マルクスの否定的言明から、スミスの役割は無視して良いものに見え易いが、実は見掛けより遙に重視されねばならない。彼は自らの貨幣論において、マルクスの価値形態論の下敷きたり得た構図を、おぼろげながら示していたばかりか、交換価値を機軸概念とする彼の複雑な価値論は、ペティ→リカード的投下労働価値説と、ベイリーを否定的媒介としたマルクス価値形態論とに分化しても良い構造を示していた。ベイリーほど強烈な関心でなくとも、スミスはむしろ肯定形で価値形態論の萌芽を示していたのである。

以下まず、スミス貨幣論の底にある論理を探ろう。

II. 『国富論』第一編第四章

周知のように『国富論』は分業論から始まる。第一編第一章で、富の根本的原因として、労働生産性が分業によって飛躍的に上昇することを述べてその三要因を示し、第二章で分業の原因を、人間固有の交換性向から説明する。これは明らかに、人間一般といわゆる経済人とを同一視するブルジョアイデオロギーの発露であるが、今そこには深入りしない。続く第三章では、分業が市場の大きさによって制限されることを指摘する。彼にとって、市場の本来の姿は、生産物の貨幣による売買に他ならないが、交換は貨幣を使用しない形でも起こる。そこで、第四章「貨幣の起源と使用について」で、未発達な交換をも含みにした貨幣の性格が解明されることになる。

この章の冒頭は、分業が確立すると社会が商業的社会になる、という指摘である。既に貨幣による交換を前提にしているが、スミスは一旦個人に立ち戻る。そこでは自分の労働で自足し得る部分は極めて少なくなっており、生産物中自分の消費を超える剰余部分を、他人の労働生産物中必要な部分と交換するようになる、と。この、剰余同士の交換という把握は、商品経済の本質を言い当てている。

つぎにスミスが取り上げるのが、分業確立途上社会における交換の困難である。ある生産物の剰余を持つ者とそれを需要するものが居れば、交換が行なわれるはずだが、当事者双方が別の生産物の剰余とそれに対する需要を持ち合わせなければ交換は成立しない。この不便を解消するために、貨幣が考案された、と。改めて言うまでもなく、この、相互

に諸商品の提供者となり需要者となる所有者間のいわばミスマッチ、つまり全面交換の困難が、解かるべき問題の軸芯である。分業の徹底から商業社会を把握したことで、スミスは、やや表皮的な次元でながら、価値形態に触れたのである。

そこからスミスは、貨幣の論理的根拠に到達する。「人びとが自分たちの勤労の生産物との交換を拒否することはほとんどないだろうと彼が想像する、何かある商品の一定量を、彼自身の勤労の特定の生産物のほかに、いつも手もとにおいておく」⁽¹⁰⁾、と。以後われわれは、この文に繰り返し言及することになる。

この後にスミスは、「種々さまざまな商品が、この目的のためにあいついで思いつかれ、かつ使用された」として、家畜に始まっていくつかの物品貨幣を並べ、高保存性、分割溶解・再結合の容易さといった特質から金属が選ばれ、重量・品位の保証のために鑄貨が成立したと述べる。鑄貨は重量・品位をいちいち計測する不便を省く。しかし悪鑄が繰り返されて、古い名称の鑄貨が、遙に少ない重量の金属しか含まないようになる。

このようにして「貨幣がすべての文明国で普遍的な商業用具となった」。

この後、以後の諸章への移行規定が述べられる。人が品物を貨幣とあるいは品物同士で交換するとき自然に守る法則は何か。それは品物の相対価値ないし交換価値である。価値という語には効用すなわち使用価値と、購買力すなわち交換価値の双方の意味がある。交換価値と使用価値はまったく異なった概念であり、最大の使用価値を持つ物たとえば水が交換価値を持たず、最大の交換価値を持つ物たとえばダイヤモンドが使用価値を殆ど持たない。

以下の諸章で交換価値を規制する原理を研究する。交換価値の真の尺度は何か。真の価格を構成する諸部分は何か。現実の市場価格を、それらの自然価格から外らせる事情は何か。

III. 価値形態論とスミス貨幣論

以上見た第4章の構図は、マルクスの価値形態論とかなり共通性がある。そればかりか、マルクス自身にあった難問を解決する示唆を与える箇所さえある。だがそのことが評価されたと耳にしたことはない。実際になかったと断定出来るほど学説史的知識はないが、ブルジョア経済学が価値形態論を試みたことがないとのマルクスの言明もあり、従来の学説

史研究の主目的が、古典派の投下労働価値説を確認することでマルクス価値論を補強することだったために、価値形態論に関心が向かわなかったことも了解出来るから、おそらく実際にも評価が生じなかったのであろう。

さてその上で、スミスの構図をマルクスが緻密に論理的に構成した価値形態論と照応させて見る。細部の食い違いを除けば、双方はかなり良く対応する。無論、マルクスが弁証法的に論理の自己展開を緻密に追っているのに対して、スミスは交換過程論的観点から、交換の不便の解消という便宜主義的説明で一貫する。用語にしても細かい点の差があるから、文言学的に煩いことを言えば違いが多々あるのは当前だが、しかし問題は大きな構図の共通性がどこまであるかである。

スミス貨幣論の冒頭は剰余生産物同士の交換だった。分業が確立した社会、商業的社会を前提にしているから、既に貨幣による売買が行なわれている。だが、この社会内部の個人に即して見ると、欲求の圧倒的部分を充足するのは、彼の労働生産物から彼自身の消費を超える剰余部分を、諸々の他人の労働生産物中彼が必要とする部分と交換することによってである。この、個人の剰余同士の交換という把握が、マルクスの「簡単な価値形態」に該当する。別の解釈も入れ得ようが、次に来るのがマルクスの「拡大された価値形態」に相応する多数者間の交換の困難である。いささか強引だが、ひとまず簡単な価値形態相当と解しておく。

といっても論理的には、ここにスミスの弱点—便宜主義的表層把握—が、集中的に現れている。マルクスは両当事商品を、相対的価値形態と等価形態に区分して丹念に考察した。それが後に、商品は常に貨幣を恋し、貨幣は思うままにいずれの商品をも購入できる、とする商品経済社会の根本的特徴を解明する起点になる。ところがスミスは、剰余の交換を言うに留まり、なぜ貨幣が商品をほしいままに買えるかについては、日常体験的事実を暗黙に導入しただけで、問いを發することさえなかった。したがって、以後の論理段階でも、相対的価値形態の発展と等価物の性格の変化といった複雑な展開は行なわれず、それだけに、説明は早分かりになったのである。

さてスミスは、第二階梯として分業が起り始めた当時の不便を指摘する。ここも表現は交換過程論的である。この状況では交換は著しく妨害され阻止されていた。剰余を持つ人がおり、その商品を需要する人がいても、後者が前者の必要とするものを持たなかった

ら交換は起こり得ない。肉屋が肉の剰余を持ち、酒屋とパン屋がともにそれを買いたくとも、肉屋が既にパンとビールを持合せていたら、交換は起こらないと述べる。主体三者を登場させ、彼らの間のミスマッチを指摘することで、構図は「拡大された価値形態」に極めて近いものになっている。この状況での交換の不便を解消すべくスミスが考案したのが、「勤労の特定の生産物のほかに」「いつも手もとにおく」「何かある商品」である。これがマルクスの一般的等価物に該当する。

おそらくここはスミス自身にとっても困難な箇所だったであろう、説明はかなり持って回ったものになっている。いわく、「分業が最初に確立されて以後、社会のすべての時期のすべての慎慮ある人は、自然につぎのようなしかたで、彼の問題を処理しようとしてつとめたにちがいない。それは、人びとが自分たちの勤労の生産物との交換を拒否することはほとんどないだろうと彼が想像する、何かある商品の一定量を、彼自身の勤労の特定の生産物のほかに、いつでも手もとにおいておくということである。」⁽¹¹⁾

全面的交換の困難を、独特の概念—「人びとが…交換を拒否することがほとんどない…何かある商品」—を導入することによって「処理」し、貨幣の根本概念を説明した。ここはマルクスなら一般的等価形態論に該当するが、全面的交換の困難を一般的等価形態の発見によって解消するのは、価値形態論全体の中でも、最大の難問として残った箇所である。スミスはその難問解消に、有力な示唆を与えていたのである。

マルクスはそこを、それまでに掲げた価値等式、リンネル1ヤール=茶1ポンド、等々の諸式を、逆に読めと述べて済ませていた。これは解答にならない。観察者の思考操作によって等式の意味を逆転しろと要求しているわけだが、他の箇所、簡単な価値形態から拡大された価値形態への移行も、一般的等価形態から貨幣形態への移行も、観察者の思考操作によるものではない。商品所有者=交換当事者が、市場を観察することで欲望を拡大し、彼ら相互の関係を拡大しながら、結果として商品経済社会=貨幣を形成する過程なのである。言い換えれば、価値形態論は全体として、商品所有者間の社会形成つまり貨幣形成の論理を説いているのである。その一番肝腎な箇所で、当事者間の社会関係の形成ではなく、観察者の思考操作が要求された。難問として残されたのに不思議はない⁽¹²⁾。

スミスの表現は全体として交換過程論的になっており、結果的には商品所有者の主體的意志を過程に導入することで、その発露が商品所有者同士の社会を形成する世界を描いて

いる。スミスは、各商品所有者が、それを提供すれば大抵の人が交換に応じてくれそうな一商品を手許に置こうとする、と言う。この際の一商品は、マルクスの一般的等価物に他ならない。「必ず」でなく、拒否することは「ほとんどないだろうと彼が想像する」と控えたところが、いみじくも、貨幣形態の一步手前の一般的等価形態を言い表しているときえ解釈できる。商品所有者の主体性を含む、価値形態論的発想と構図を持つスミス貨幣論を軽視したことが、マルクスの価値形態論に、後々まで難問を残す原因となっていたのである。

これに続いて、ギリシャ神話における牛（貨幣の機能としては価値尺度に他ならない）に始まって金属鑄貨の成立に至る貨幣史の叙述は、交換の不便の除去過程として一貫し、歴史的にはスミスの博識ぶりが開示されたところだが、価値形態論としてはもはや終結部分の、一般的等価形態から、貨幣形態への移行、等価物の使用価値的性格によって貨幣は少数の金属に限られる、となる箇所であって、さほど問題の残る箇所ではない。むしろ、スミス自身の論理を徹底させて、ここに選ばれる商品は、所有者にとって使用価値として即時直接有用でない、日常的消費のためにはあまり依存しないものであると強調しておくべきであったろう。

さて、この後検討すべき論点が二つ残っている。一つは、スミスの、上記貨幣商品の特徴が、彼の食物論と奇妙に照応していること、もう一つが、第四章の末尾に置かれた価値論である。食物論との類似は、これまであまり論じられたことがないように思うので先に取り上げる。価値論については繰り返し論じられて来た。こちらはむしろ、価値形態論との関わりの面を取り上げるにとどめる。

IV. スミスにおける貨幣と食物

食物論は『国富論』第一編の第十一章「地代について」の第一節「つねに地代を提供する土地生産物について」の冒頭にある。すなわち「人間は、他のすべての動物と同様に、生存手段に比例して自然に増殖するものであるから、食物は、多かれ少なかれ、つねに求められている。食物はつねに、多かれ少なかれ、ある量の労働を購買または支配することができるのであり、それを手に入れるためにはよろこんで何かをしようとする人がいつでも見いだされる」⁽¹³⁾。

スミスによれば、貨幣に対してはいかなる商品の所有者も喜んでその商品を提供する。一と言うより、引用しておいた文面では、多種の生産物所有者が、それと引き換えに各自の生産物を喜んで提供するであろうような特定商品が、貨幣として多くの生産物所有者に追加的に保有される、である。ところが食物に対しては、それを手に入れるためには喜んで何かをしようとする人が必ずいる一つまり「労働」が提供される。貨幣に対しては商品、食物に対しては労働が、提供される。この類似性には注目しておいて良い。

いささか細かいところから始めれば、この「食物」は主食たる穀物である。「ヨーロッパでは穀物が、人間の食物として直接役立つ主要な土地生産物である」「穀物畑の地代がヨーロッパでは他のすべての耕地の地代を規制する」⁽¹⁴⁾。他の耕地とは、フランスの葡萄園やイタリアのオリーブ園のことである。こちらは穀物に規制される例外である。ところが、これらと別の作物も考慮されている。「人びとが、共通に愛好する植物性の食物が、ある植物からとられ、その植物が…穀物よりもはるかに多量にとれるとすれば、地主の地代…地主の手もとに残る剰余食物量は、必然的に穀物のばあいよりもはるかに大きいだろう。…したがってその地主は穀物畑の地主よりも多量の労働を購買または支配することができるだろう」⁽¹⁵⁾。この、はるかに多量にとれる植物として考えられているのは米である。つまりスミスの場合、食物として考えるのはまずヨーロッパの穀物つまり麦類であるが、それには限らない。生産性の高い米が導入されれば、そちらがもっと多い労働を購買または支配することになる。

その上で、貨幣と食物の類似性に戻る。煩く言えば、貨幣が商品をほしいままに買えるのは流通形態間の関係、食物が労働をほしいままに買えると言うのは、明らかに労働を労働力と考えているのだから、食物と労働力の間での再生産関係、宇野的表現を使えば経済原則的關係であるから、そもそも次元が異なる。そう言い放してしまえば、ここは単なる類推に過ぎない。だがスミスの場合、単なる類推であったのか。彼にとって、貨幣は分業促進の決定的要因たる市場を最大限拡張する要因、食物は賃金と地代の両範疇を規定する基礎的な要因に他ならなかった。つまり貨幣と食物は、彼の体系の基盤だったのである。

その中でどちらがより根底的であったか。食物→貨幣の順で発想されたように思われる。無論、スミス自身の文章に明確な決め手があるわけではないし、逆に考え得る理由もある。それでも、食物については、食物供給増→人口増＝労働力供給増→食物需要増の循環を考

えていることは明らかだから、労働力供給は絶えず食物供給を上回り、従って食物の労働力購買力ないし支配力は一多少の変動を含みながら一絶えず維持されると理由付けられている。のみならずスミスの場合、食物供給が人口ひいては労働力供給を定め、食物価値が労働力の価値を、ひいては諸商品の価値を定めると、穀粒価値説的に考えているところさえある。

これに対して貨幣の場合には、貨幣が諸商品を買えること自体についての説明はなく、事実に前提にした上で、諸物に対して購買力ある商品が準備される、と説かれている。つまり、根本的な次元にある経済原則に作用すると把握された論理が、流通形態の説明に転用されたと見て良いのである。

こうした捕え方の補強になりそうな論点として、つぎにスミスの椀飯振舞論を取り上げておく。『国富論』に都合四回出てくる。

まず第一編地代論の第二節。「食物への欲望には、だれでも人間の胃の狭い容量による制約があるが、建物、衣服、身のまわりの品物、家具という便益品や装飾品への欲望には制約も一定の限界もないように思われる。したがって自分で消費し切れないほどの食物を支配できる人びとは、つねに食物の剰余…を、いまいった他の種類の欲望の充足とよろこんで交換する。…それらは充足させようどころか、まったく無制限と思われる。貧者は、食物を手に入れるために、富者のそうした好みを満足させようとつとめ」⁽¹⁶⁾、その結果職人の数は食物の量が増加するにつれて増加し、加工材料を産む鉱業も発達する。

ここは直接椀飯振舞を論じたのでなく、食物剰余の所有者が便益品や装飾品を入手することで周囲の貧民を養う、既に製造業や商業が発達した状況を説いている。農業生産力の上昇に応じて鉱工業も発展する、と産業連関的に読んで良い。学説史的には、『道徳感情論』における「見えざる手」⁽¹⁷⁾、そこでの地主の食物配分の論理の転用である。

つぎに第三編第四章。「対外商業も精巧な製造業もない国では、大土地所有者は…そのすべてを自宅でのいなか風のもてなしに消費する」「彼はつねに多数の従者や召使に囲まれており、それらの人びとは…もばら地主の恩恵によって養われるため…彼に服従しなければならない」「ヨーロッパで商業や製造業がひろがる以前には、…富者や権者のもてなしは、今日われわれが容易に思い描きうるものをはるかに超えている」ウェストミンスター・ホールはウィリアム赤顔王の食堂だったが、彼の客人を入れるのに広すぎはしなかつ

た。…ウォリック大伯爵は彼のさまざまな所領で毎日三万人をもてなしたといわれる⁽¹⁸⁾。

ここは経済史を論じた編に含まれる、都市商業が農村の発展に寄与するという指摘を行った章であり、その関連を欠く状況では椀飯振舞になると言うのである。全体としては『グラスゴウ大学講義』の一部分に共通するところがある。

第三が、第五編第一章第三節の公共事業費論。「所有地の地代のほかに、聖職者は、十分の一税という形で、…他のすべての領地の地代のきわめて大きな部分を所有していた。この双方の種類地代から生ずる収入は…現物で支払われた。

その量は聖職者が自分で消費できる量をはるかに超えていた」「この巨大な剰余から利益を引き出すには…贅沢のかぎりの接待や、きわめて広範な慈善に使用するしかなく」「彼らはあらゆる王国のほとんど全貧民を扶養したばかりでなく、多くの騎士や郷土も、信心を口実にして、しかしじつは聖職者の接待にあずかるために、修道院から修道院へめぐりあるく」「聖職者の接待や慈善もまた、大きな現世的な力を彼らに与えたばかりでなく、彼らの霊的な武器の重みをも大いに増大させた」⁽¹⁹⁾。椀飯振舞の効は従者・召使の増加のみならず霊的権威の増大にもなると言うわけである。

最後が第五編第三章、公債論。「商業の拡大と製造業の改良にさきだつ未開状態の社会」では「大きな収入の所有者は…できるかぎり多くの人びとを扶養する以外には、その収入を消費あるいは享受することができない」「奢侈のないもてなしと、見栄をはらない気前のよさとが、ものごとのこの状況においては、富裕名門の主な支出である」⁽²⁰⁾。

貿易や商業や製造業が未発達な社会では、他に使い道のない大量の食物を、接待や慈善で大勢の人に振舞う。これが多くの人々の尊敬や従属を得る手段である。—この認識は、貿易や商業や製造業が発達した時代における、食物が労働を購買または支配するという把握と通底する。それゆえ、遡って、食物の労働購入または支配の論理が貨幣の商品購入または支配の論理に転用されたと見做し得るのである。スミスの交換過程論的思考が、この転用をいっそう容易にしたであろう。

V. スミス価値論の外形的特徴

スミスの価値論について、本格的な考察は当面出来ない。改めてコナしておかねばならない文献がいくつか⁽²¹⁾あり、そのための時間も紙幅もとうてい足りないからである。本稿

では、予備的考察として、外形的特徴だけを拾い挙げる。それはそれで、多少は意味のある作業であろうと思う。

第四章の末尾にあるように、スミスの価値は、使用価値と区別された交換価値あるいは相対価値である。これが後の展開の出発点をなす。直後の第五章、第六章の、いささか錯綜した議論をひとまず措けば、その後は、賃金、利潤、地代の三大所得論であり、これで再生産が総括出来る仕組みである。諸商品の自然価格は、それぞれに自然価格水準にある三大所得の合成からなる。これがスミス価値論の主調である。体系性もあり、そのかぎりでは判りやすいし説得力もある。

ことをいささか面倒にするのが、第五、第六章である。既に市場と貨幣を説明した。つぎにこの二章で価格を論じるのは当然の成り行きである。

ところがスミスの根本的出発点は分業であった。それゆえ第五章では言う。「生活の必需品・便益品・娯楽品は大部分他人の労働によって供給される。したがってそこでの貧富は、「彼が支配しうる労働、つまり彼が購買しうる労働の量に対応する」。ここから、真実の価値尺度は労働で、それによる商品価格は実質価格、貨幣による価格は名目価格だと言う区別立てがなされ、中間的な穀物による価格も出てくる。その際、力点はむしろ労働にあった。労働こそは最初の価格だとか、本源的購買貨幣だとか、労働だけが価値変動をしないから、究極的で真実の価値基準だといった認識が示されている。

ことが面倒になるのは、いくつかの混線要因があるためである。まずスミスには独立した労働過程論がない。おそらくそのせいで、投下労働が産出した価値と投入された労働力の価値（コストとしての労賃）が混同される。もっとも、投下労働と労賃コストは、同様に独立した労働過程論のないリカードがきちんと選り分けているから、価値の量的変動を論理的に詰めて考察すれば、それだけでも区別できたのかも知れない。つぎに英語のLabourは労働過程も労働者も双方意味し得るから、そこからも混同が起こる。その区別から始めなければならなかったのにスミスは区別せず、繰り返し混同を起こした。さらに、交換価値論はあっても価値形態論までは徹底せず相対価値論にとどまっており、価値形態論と投下労働価値説が未分化であったために、特に「労働」を買う時には、混線要因が重なって作用したのである。

他人の生産物を買うのと他人を雇って自分の代わりに、あるいは自分の享楽のために働

かせるのが同じでないことは自明である。ところがスミスには同じに見える。しかもそこを、やや実体的に、等しくToil and Troubleを省く、と捉えてしまった。これは労働本源的購買手段説に由来するが、これで実体的にも支配労働価値説で一貫した形になる。この「労苦と手数」とか本源的購買貨幣とかいった把握は、尊敬する親友ヒュームに由来⁽²²⁾するから、スミスの議論にはよけい強く刻印されたのであろう。

この第五章を踏まえて、第六章の歴史段階的価値論が現れる。「資本の蓄積と土地の占有との双方にさきだつ社会の初期未開の状態」にあつては、交換は生産に費やした労働時間によって行なわれると言う。そこで有名な、一頭のビーウ”ァーと二頭の鹿との交換が出てくる。このかぎりでは、原型的な投下労働価値説である。ところが、スミスの考察対象は、既に資本蓄積と土地占有が行なわれた「文明社会」であり、ここでは資本も土地もそれぞれに分け前を要求するから、商品価格は賃金・利潤・地代、それぞれの自然価格の合成になる。リカードも指摘しているが、投下労働価値説と価値合成説では明らかに食い違うのに、スミスはそこを一貫させず、併記した。

未開社会の労働価値説と文明社会の価値合成説の併存。これは俗耳に入り易い議論である。現に『資本論』第三巻の出版に当たって、マルクスの、価値と生産価格の矛盾を衝かれたエンゲルスが、それへの回答としてこの歴史段階説をスミスに言及することなしに唱えた。かつて有名だったソ連の『経済学教科書』も、それを踏襲した。その継承自体も通俗的なのである。

リカードのスミス批判が示すように、価値合成説自体根本的には誤りなのだが、今はそれは措く。そもそもスミスは歴史的二段階説で一貫しているわけではない。価値論では資本蓄積と土地占有に先立つ「社会の初期未開の段階」について語り、椀飯振舞論では商業の拡大と製造業の改良以前だが大土地所有のある「未開野蛮な社会」について語っていた。その第二段階では、そもそも交換が起こるのか否かも問題だが、仮に起こったとしてどういう交換価値が成立するのか。資本はなさそうだから地代と労賃の合成価格なのか？ その際、椀飯振舞をする地主が得る地代の自然率とは一体何か？ スミスの歴史は、恣意的便宜主義的段階設定である。併存説も同じである。結局スミスは「文明社会」についてだけ、三大所得の自然率の合成と言う、表皮的辻褃合わせを行なったに過ぎない。折角「社会の初期未開の段階」における等・投下労働交換を指摘しておきながら、投下労働価値説を回

避し、回避したから、自然価格合成説による、表皮の辻褃合わせが成り立ったのである。

学説史的には、投下労働価値説はペティが唱えていた⁽²³⁾。ペティはそれで全体系を構成したわけではないが、ともかく労働価値説の最低限の要素は指摘した。スミスはペティを継承しなかった⁽²⁴⁾。スミスを継承したりカードが、おそらくペティを知らないままに、スミスを内在的に批判することで独自の体系を構成した。これは、マカロックが繰り返し指摘した⁽²⁵⁾とおりでである。従って、労働価値説史としていえば、本筋はペティ→リカードであって、スミスはこの線から、完全に外れるのではないにしても、主流ではない。価値を全面的に交換価値とし、支配労働価値説を採るスミスは、労働過程論を欠くためもあって、投下労働価値説と馴染まない面があるのである。

VI. スミス貨幣論の源流

スミス貨幣論は、自覚的に継承されることはなかったものの、マルクスの価値形態論の萌芽ではあり得た。それほどに先端的な議論を、折衷的表皮の観察者のスミスがどこまで独創しえたのか—これを最後に取り上げる。

キャナンの考証によれば、スミス貨幣論の源流はハリスの『貨幣と鑄貨試論』⁽²⁶⁾にあるようである。スミス貨幣論中でも、肝腎の、一般的等価形態論相当箇所の叙述は、ハリス説に「よく似ている」⁽²⁷⁾。そこでひとまず両者をざっと対比する。確かに、全体の流れが良く似ている。

ハリスの第二章「貨幣と鑄貨」は、「物々交換の不便と不完全」から始まり、諸物の標準的価値尺度としての貨幣、貨幣素材として要求される特性、金属が貨幣素材として最適、中でも金銀が良い、鑄貨の有用性、…と続く。スミス貨幣論が大筋この通りであることは既に見た如くである。そこで改めて冒頭部分をもう少し細かく見る。

ハリスは言う。最初の商業は物々交換であった。が、人口が増え技術が発展すると、単なる物々交換は不便不都合になった。或る人が他の人の財貨を欲するとして、後者が、前者が交換のために持っている財貨を必要としないという場合がしばしば起こる。前者の財貨が幾度も物々交換されて、しまいには後者の欲する特定の財貨に変わるとしても、そこに至るまでの経過は長たらしく厄介である。手形で払う約束、財貨で払う約束にもさまざまな不都合と時間がかかる。

そこから次の「貨幣とは何か、それはどこから生まれたか」へ移る。その冒頭でハリスは言う。「単純な物々交換の持つ大きい不便を避けるために、あらゆる他物との交換にあたって普遍的に受容されるべき素材ないし財貨がやがて承認されたのであって、これがわれわれの貨幣と呼ぶところのものである」⁽²⁸⁾。

構図は良く似ており、同じだといっても良い。ただスミスの方が構想が練られているし、表現も洗練されている。

まずスミスは剰余同士の交換と言う出発点を明記していた。ハリスにはこれがない。マルクスなら「簡単な価値形態」に当たる箇所だから、スミスがずっと前進したと言って良い。

つぎに全面交換になるが、商品所有者同士のミスマッチの叙述では大差はない。ただハリスは約束手形を利用した財貨による支払いを含めているのに、スミスの叙述ではこれが整理されて簡潔になっている。マルクスなら「拡大された価値形態」である。だが、ここから次への移行に際して、いささかの違いが出て来る。ハリスの場合は、手持ち財貨の交換を繰り返して結局相手の欲する財貨を入手する過程を含めた上で、これが著しい時間と不便を伴うとした。これに対してスミスは、「人びとが自分たちの勤労の生産物との交換を拒否することはほとんどないだろうと彼が想像する、何かある商品の一定量」と範疇化した。全面交換のミスマッチを「拡大された価値形態」とすれば、スミスが範疇化した「何かある商品」は一般的価値形態に当たる。ハリスはそこを飛ばして貨幣に行ってしまうのだから、スミスの方が優れていると言って良いのだが、ハリスが述べた、時間と不便の要素も「拡大された価値形態」の含む問題として無視しない方が良い。

結局、構図の原型が他にないとすればそれはハリスに由来し、スミスはこれを吸収改善したに過ぎないと言い得る。キャナンによれば、貨幣論ばかりでなく、分業論、職業論、鑄貨論等いくつかの点で、スミスはハリスと共通する議論をしている。キャナンは指摘していないが、富が土地と労働の産物だと言う、スミスが繰り返した富概念もおそらくペティに由来し、ハリスの書の冒頭に要約を通じてスミスに吸収されたのである。例によって名を挙げていないが、蔵書になくともエディンバラ大学図書館は所蔵している⁽²⁹⁾から、スミスがハリスから、見かけ以上に多くの点で強い影響を受けていた可能性はあると見て良からう。貨幣論では、このネタが極めて有意義に用いられ、いささか前進した。それ以上

に進めなかったのは、スミスの個人的能力を別とすれば、彼も免れなかったブルジョアイデオロギーのせいである。

註

- (1) 『資本論』国民文庫版①, 89ページ
- (2) 例えばポール・スウィージー、都留重人訳『資本主義発展の理論』1967年 新評論を見よ。マルクス経済学でありながら、価値形態論も信用論もない。
- (3) 『資本論』上掲邦訳、144ページ
- (4) ヘーゲル『精神現象学』冒頭の「感覚的確信」が、「いま」と「ここ」の二要因から始まっている。これはマルクスの価値形態論の発想の源泉であるように思われる。後に知ったことだが、類似の説を梅本克己が唱えていた。梅本「始元の弁証法」1956年、『梅本克己著作集』第5巻1977年三一書房。
- (5) アングロサクソンでなく、マルクス排斥家でもないシムペーターでさえ、価値形態論の意義は評価できなかった。彼は「マルクスがリカルドの水準にまではついに到達しえなかった貨幣論における明白に貧弱な成果」(中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』上1962年東洋経済新報社39ページ)としか捉え得なかったのである。
- (6) Samuel Bailey, *A Critical Dissertation on the Nature, Measure and Causes of Value*..., London 1825, サミュエル・ベイリー、鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』1941年日本評論社、1947年世界古典文庫。
- (7) 『資本論』前掲邦訳、92ページ
- (8) 同上、144ページ
- (9) 『経済学批判』の商品論は、『資本論』のそれに近いところまで来ているが、価値実体論と価値形態論が癒着している度合いがまだ強い。もっとも、『資本論』でも両者の分離が十分でなく、そのため価値形態論の展開に不十分が残ったと言えるが、『経済学批判』では癒着の度がもっと大きい。
- (10) 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』岩波文庫版(-), 52ページ
- (11) 同上、同ページ
- (12) 価値形態の第二形態から第三形態への移行が「逆転」で済むかと言う問題は宇野弘蔵が指摘し、宇野学派の共通認識となった。参照、宇野弘蔵編、演習講座『新訂経済原論』1967年青林書院、44～48ページ。筆者はそれを、当事者の行為と観察者の思考のズレとして捉えてみた。馬場宏二『新資本主義論』1997年名古屋大学出版会、57～58ページ。
- (13) 『国富論』前掲邦訳、256ページ
- (14) 同上、279ページ
- (15) 同上、同ページ
- (16) 同上、288ページ
- (17) アダム・スミス著 水田洋訳『道徳感情論』1973年 筑摩書房、281ページ
- (18) 『国富論』岩波文庫(-)、235～6ページ
- (19) 『国富論』岩波文庫(四)、86～7ページ
- (20) 『国富論』岩波文庫(四)、286ページ

- (21) ジェームス・スチュアート『経済学原理』：星野彰男『アダム・スミスの経済思想』2002年 丸善株式会社、同「支配労働価値説をめぐるスミスとリカードの相違」『経済系』214号、2003年1月、「スミス価値論批判への批判」『経済学論纂』44巻5/6号、2004年3月、「才能論と価値論」『経済系』219号、2004年4月：Tony Aspromourgos, *On the origins of classical economics*等。
- (22) 「この世に存するものはすべて労働によって購入される」。ヒューム、小松茂夫訳『市民の国について』岩波文庫下17ページ。
- (23) 参照、馬場宏二『もう一つの経済学』2005年、御茶ノ水書房、246～252ページ。
- (24) 参照、馬場宏二「ペティと『国富論』」、大東文化大学『経済論集』87号、2006年7月
- (25) 参照、馬場宏二、前掲、『もう一つの経済学』、262～268ページ
- (26) Joseph Harris, *An Essay upon Money and Coins, pt. I*, London, 1762. 小林昇訳『貨幣・鑄貨論』、1975年、東京大学出版会。
- (27) 『国富論』キャナン版の編者註。大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫一、134ページ。
- (28) 前掲、ハリス著、小林昇訳『貨幣・鑄貨論』47ページ。
- (29) Hiroshi Mizuta ed., *Adam Smith Library Catalogue*, Oxford, 1998.

追記

脱稿後、藤塚知義「アダム・スミスの貨幣論について」（『金融経済』10号、1951年8月）があったことに気付いたが、本稿の内容を変更すべき叙述は見出せなかった。